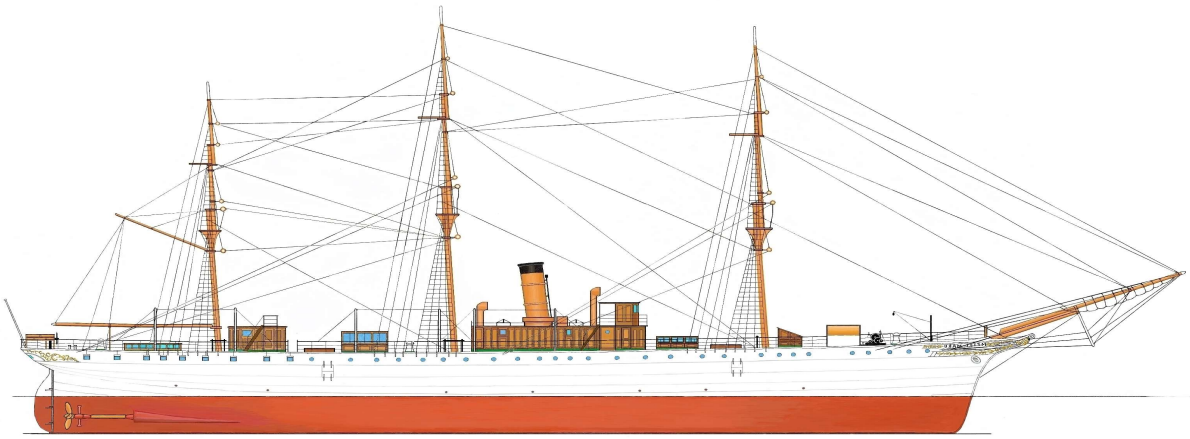
Ocean

海洋塾機関誌第22号



日本海洋塾のURL

Ocean記載のURL

令和4年8月25日

特定非営利活動法人 日本海洋塾
日本海洋塾は、世界を結ぶ海と船を、広く皆様に伝える活動により、海洋立国意識の拡充を目指しています。

§映画『海のますらを』の挿入歌　余聞§

正会員　佐藤勝二郎

1.挿入歌の題名調査状況

先の「Ocean21 号」に、昭和 15 年に製作された、**文化映画「海のますらを」**のラストシーンで赤枠内の合唱歌が流れることを紹介した。

マストに風が唸るとも
われら海の若人の
鍛えし腕と強固なる
意気と熱とで押し切らん
世界の果てまで乗り切らん

この合唱歌の題名を東京海洋大学の百周年記念資料館にある映画のシナリオを調べたが、題名を知ることができず、調査を継続すると報告した。

コロナ感染を避けるため外出を控えているので、調査は限定されてしまっているが、在宅で可能な海洋会の会誌 1 号（明治 30 年 3 月）から 515 号（昭和 17 年 12 月）まで関連記事の有無を調べたが発見できなかった。

明治丸ミュージアム事務室に、百周年記念資料館に保管されているシナリオ以外の関連資料の有無を問い合わせたが、見当たらないとの回答があった。

財団法人松竹大谷図書館に問い合わせたが、関連する資料は無いとの回答があった。

この挿入歌の題名は不明であるが赤字で示した部分の歌詞は、『大成丸世界周航の歌・マストに唸る（奈良山徳治作詞・作曲）』の歌詞の一部＜1 番の「マストに風が唸る声」・・・・、6 番の「鍛えし腕と強固なる」・・・＞が引用されているので、戦前・戦後に軍歌や歌謡曲の作曲をしている、音楽担当のスタッフの細田義勝氏の作品ではないかと推定されるのである。

２.「文化映画」とは

「海のますらを」の撮影当時の、海洋会の会誌・海洋 489 号の「越中島たより」には、題目が『**文化映画**（海の若人）の撮影』として製作目的が紹介されている。

この映画が作られたのは、昭和 12 年に盧溝橋事件が起こり、日中戦争が拡大して行く過程の昭和 15 年であり、皇紀二千六百年で東京オリンピックも予定され、世相は国威発揚で軍事色が強まっていく時代であった。

ここに「文化映画」と銘打っているのは、昭和 14 年に「**映画法**」が制定され、文化映画とは「国民精神ノ涵養又ハ国民智能ノ啓培に資スル映畫ニシテ劇映画ニ非ザルモノ」との定義付けが行われたことによる。

この法律はナチス・ドイツの映画法をお手本として、映画製作を政府の統制下に置くためのものであった。また、事前検閲が出来るようになり、映画の監督、俳優、撮影者などの技能者は試験を受けて、合格して、政府に登録し鑑札を受けねばならぬよ

うになり、さらに映画館は長編劇映画の上映にあたり「文化映画・時事映画」を併映することが義務付けられた。

「海洋」４８９号の越中島たより
昭和一五年十月

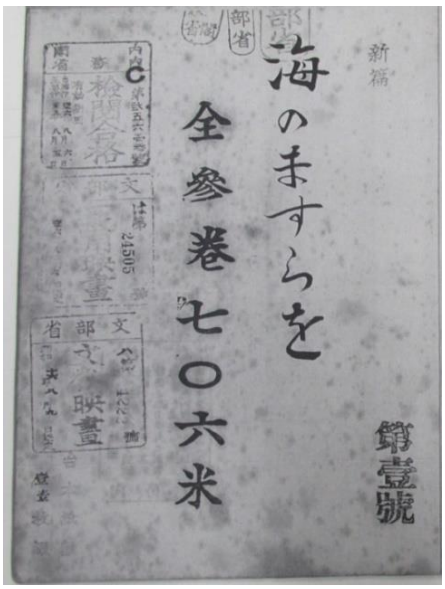
文化映畫（海の若人）の撮影

南進論とか海洋發点とか航權擴張とかゞ國民層に高調されてきた今日、その第一線に活躍すべき海員の鳳雛を育て上げる商船學校の生活を紹介して海事思想を鼓吹するため、松竹文化映畫製作所がこゝに新鋭田中監督を派して、本校々内生活及び大成丸生活を九月下旬から撮影することゝとなった。関谷、矢崎両教授及び伊藤、渡邊両生徒主事達が之の指導にあたる。恐らく本年の十一月頃から全国の松竹系映画館に上映さるゝことゝならう。

この映画法は、その本家のドイツでは、かつて映画の芸術性の高さで世界をリードしていたが、映画法制定後はイギリスやフランスの下位に位置するようになったと云われている。

映画法の中の「啓培」なる単語は、角川大字源、三省堂大字林、学研漢和大字典等を調べても、発見することは出来なかったが、意味するとはご理解できると思う。

シナリオの中表紙



シナリオの検閲印の拡大

３.「文化映画・海のますらを」以前の映画

映画法が出来る前から海軍は映画による軍事思想を普及させることに熱心であり、昭和 10 年 5 月の海洋会誌 424 号の「越中島たより」には、「日活」によって「東京高等商船学校」が登場する映画「海國大日本」の撮影があったことが報告されている。

海洋４２４号「越中島たより」
昭和十年五月

○日活寫眞班の本校撮影

四月十八日、夜半の雨やうやう晴れて本日は早朝より近頃稀にみる上天気であつた。この日突如として日活の活動寫眞班が我が越中島の校舎を訪れた。

これは我が海軍の軍事思想普及部で更に一層一般國民に軍事思想を普及せしむべく、海軍兵學校及び本校生徒の日常生活を取入れて「海國大日本」と言ふ題名の下にトーキーを完成し廣く一般國民に公開する事になったためで、既に兵學校の方は撮影を終えて本日は本校の練習状態、殊に明治丸の操帆練習を初めピンネースの操艇よりヨットの帆走練習に至る迄全部をフイルムに収め、更に寮生活の實状迄も取入れて歸つた。

傳へ聞く所によれば、この「海國大日本」の筋書きは、こゝに若き希望に燃へる青年四人の友達があつた。その中の三人は海軍に志して兵學校に入學した。他の一名は我が東京高等商船學校を志望して首尾よく入學した。所が兵學校に入學した三人の中一人が不幸にも在學中健康を害し遂に退學の止むなきに至った。然し彼の若き心は一切を克服し、やがて健全なる身體に返つて今度は飛行家を志し、こゝに朋友四人を中心として空に海に、我が帝國を守ると云う筋書だと言われてゐる。

尚この寫眞は日活のスター連多數出演し、トーキーとして作成せるもので我が越中島の校歌、寮歌も取り入れられその他本校の大略が一般世人に紹介せらるもので、その製作完成は五月中旬頃。海軍では五月二十九日の記念日を期して特製したもので日露海戦満三十周年の記念日を大いに意義あらしめ様とするものである。

４．映画「海国大日本」の挿入歌

この映画は、昭和 10 年 5 月 27 日に完成し、「日活」の配給により映画館で上映されている。

東京高等商船学校では映画大会があり、この映画を観覧したと海洋 427 号の「越中島たより」で報告されている。

海洋４２７号「越中島たより」
昭和十年八月

○映畫大會のタ

七月十六日（火曜日）午後七時より特に夜の自習を休んで生徒寮で活動寫眞大會を開催した。当日の上映々畫は、

一、海　豹　島
二、銀嶺のニュース
三、太平洋の暁
四、海國大日本

以上の四種類で生徒は何れも興味深く觀覽したが、中にも「海國大日本」は嘗て本會誌に發表したる如く、海軍々事普及部の膽入りで先般日活會社が本校を訪問の上、明治丸の操帆練習を初めボートの操艇練習ヨットの帆走等をカメラに収め兵學校の分と合わせて製作したもので、今眼前に本校の各技術練習状態を見て一同感深きものがあつた。

只惜しむらくは、未だ本校の正門が完備せず此處に掲ぐべき「東京高等商船學校」の校名表示板がなく、兵學校の堂々たるものに壓せられ、その結果本校を知らざる一般觀衆の中には、明治丸が現れても之が果して本校のものか兵學校のものか區別のつかざる者が可成りあると思ふ。然し本校々歌及び寮歌が主題歌となつて畫面の進むと共に次々にと聞へて來る有様は蓋し痛快であつた。

この「越中島たより」には『本校々歌と寮歌が主題歌となって次々にと聞へて來る有様は蓋し痛快であつた』と記されている。

「校歌」は、当然昭和９年に北原白秋作詞、山田耕筰作曲の『東京高等商船学校校歌「暁にひゞく」』で間違いはないと思うのである。

「寮歌」は複数が挿入されると思われ、是非聞いてみたいので、まずこの映画フィルムが存在しているのか調べてみたが、「日活」の映画のデータベース、国会図書館デジタルコレクション及び国立映画アーカイブには、映画「海国大日本」のフィルムは存在しないことが分かった。

これで、挿入された寮歌を確認することが出来なくなったが、映画撮影の昭和 10 年春までに存在した寮歌は、海洋会発刊の「檣濤歌集」からピックアップすると以下のようになるので、このうちのいくつかであると推定されるのである。

まず、考えられるのは次の二曲である。この二曲は「東京高等商船学校学生歌」というタイトルで「校歌・暁にひびく」とＡ面Ｂ面の関係で、帝国海軍軍樂隊が演奏する SP レコードが作られており、東京海洋大学の百周年記念資料館に保存されている。海洋会ボランティアクラブがこの SP レコードをＣＤ化している。

商船学校校歌　　**総帆追風に**　　大正年代

作詞・作曲者は不明であるが、「暁にひゞく」が出来るまでの校歌。

商船学校寮歌　　**吾が越城**　　昭和 2 年以前

昭和二年七月の商船学校校友会誌（海洋）350 号 65 頁に

・・・勇壮な「我が越城」を合唱・・・の記事あり。

二番手の推定候補は「大成丸」に関する練習船歌と潮騒節が挙げられるが・・。

大成丸世界周航の歌	**マストに唸る**	大正 2 年
大成丸世界周航帰帆の歌	**懐かしきかな野島崎**	大正 2 年
大成丸第２５次遠航の歌	**戦雲去って永へに**	大正 10 年？
大成丸鹿島立ちの歌	**泊り静けき**	昭和 6 年
大成丸帰帆の歌	**空は高く**	昭和 6 年
大成丸首途の歌	**麗しの日よ**	昭和 2 年
大成丸第４２次遠航の歌	**寒風吹きしく**	昭和 6 年
大成丸３０年の歌	**見よ藍青の**	昭和 10 年
大成丸５０次遠航の歌	**建造以来３０年**	昭和 10 年
ダンチョネ節		明治時代から
ソレホイ節		明治時代から
タンツ―節		大正元年頃
大成丸　サニ公節		昭和 7・8 年頃

大成丸学友会が、昭和 9 年 12 月の海洋 419 号 45 頁に、「檣濤歌集」に採用されていない、次の題名の寮歌の「歌詞の作者」を求めている記事があり、これらは三番手の候補と考えられるのであるが・・・・・。

「大成丸行進曲」、「ホイールの歌」、「大漁節」、「題名不詳（驕りの春の色褪せ

て)」、「大成丸帰帆」、「黒潮の香り」、「墨堤」、「題名不詳（神州の精凝るところ)」、

挿入歌の候補は多数あり確定は出来ないが、学生により多数の『寮歌』が作られていたことは分かるのである。

５．映画「海国大日本」の主題歌

映画フィルムは発見できなかったが、ネット検索により映画製作会社やスタッフ、出演者を知ることが出来、また本当の主題歌があり世界的オペラ歌手の藤原義江が歌うレコードが発売されたことも分かった。　主題歌は国会図書館、YouTube、ニコニコ動画等で聴くことが出来る。

映画「海国大日本」　スタッフ
製作：日活＝共同映画社＝太秦発声映画＝J.O.スタジオ＝日本ビクター（5 社）
配給：日活
監督：阿部豊
脚色：荒巻芳郎
原作：海野啓一
撮影：碧川道夫、渡辺孝、町井春美、円谷英二、
音楽：海軍軍楽隊、ビクター管弦楽団
主題歌：海野啓一

主題歌のレコードのレーベル
タイトル：「海国大日本」
作詞：海野啓一
作曲：藤原義江
編曲：鈴木静一
独唱：藤原義江
伴奏：日本ビクター交響管弦楽団
製作社：ビクター
発売年月日：1935 年（S10）5 月

海国大日本

作詞：海野敬一
作曲：藤原義江

収録：軍歌戦時歌謡大全集（評）

１．
棚引け星雲　躍れよ黒潮
行け行け同胞　海国男児
夜明けだ　輝く夜明けだ
海国日本　雄飛の時だ

２．
歌へよ春風　響けよ青海
行け行け日の丸　高らにかかげ
夜明けだ　栄ある夜明けだ
日本の航路　伸び行く時だ

３．
咆れよ潮風　轟く大波
行け行け皇軍　怒濤をわけて
夜明けだ 燃えたつ夜明けだ
皇国海軍　奮起の時だ

４．
走れよ瑞雲（みずくも）　高鳴れ綾波
行け行け大鳳　翼も高く
夜明けだ 飛び立つ夜明けだ
航空日本　飛躍の時だ

参考文献　　日本映画史２　増補版　佐藤忠男　岩波書店　　2006.11.10

§じじ小屋 建築奮闘記§

正会員　松﨑光男

まだ、会社勤め時代の、東京商船大 13 回生の同期会で、恒例の、出席者による近況報告が行われた。　名前は忘れたが、機関科の同期生が「引退後の趣味を充実させるため、現役で資金があるうちにと思い、溶接の機械を買った」と報告した（件の彼は、数々の鉄門扉を作成したと、後の同期会で報告があった）。それを聴いて、現役を引退した後のことなど何も考えていない我が身を反省した。

早速、現役を引退したら何をしようか、何ができるかと考えてみた。　直ぐには思いつかなかったが、小学校の時は「模型飛行機クラブ」に所属したり、後には船の模型を作ったり、物置小屋を建てたりと、昔から手作業が好きだったので、取り敢えず、偶々チラシが回ってきた社内販売（取引先の関係で割引販売の斡旋回覧が回ってくることが多かった）で、電動工具の３点セットを購入したが、結局、第二の人生が終了するまで結構忙しく、気にはなっていたが、購入した工具は１，２度使っただけで本格的に使用する機会が無いまま、物置で箱に入ったまま埃を被っていた。

一方で、「オーム真理教」で後から有名になった、富士山麓の「本栖湖」に近い、山梨県の「上九一色村」（現在は、富士河口湖町に名称変更）に、義父の仕事関係の義理で、藤田観光が売り出した別荘地を購入所有していて、20 年近く空き地にしていたので、定年近くになったらログハウスでも建てようかと考えていたが、長年経っても周囲に別荘は建たず空地ばかりで、家内中からの反対にも遭い、断念した経緯があり、何となく一人で自由になる空間に憧れていた。（当該地は現在も更地のまま所有）

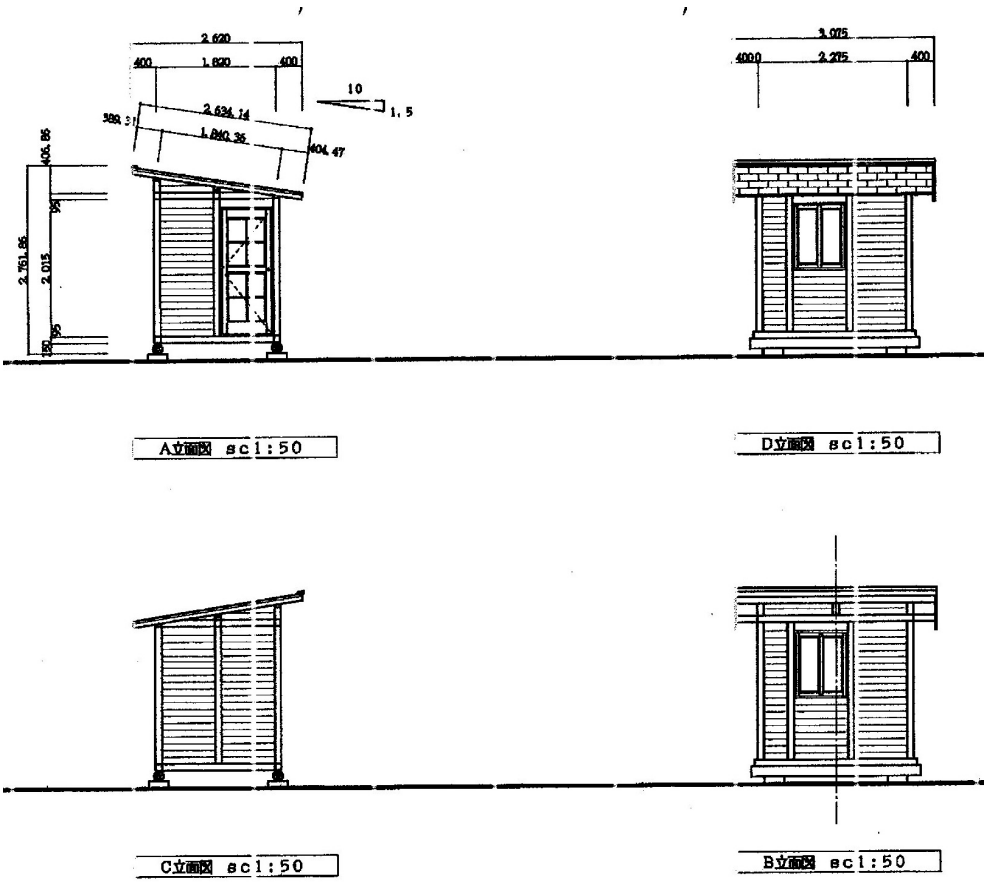
そんな時、ふと、「作業小屋があれば、家の中を汚さず、音も気にせずに工作作業が出来るなぁ」と考えついた。　幸い、家の前の道路と玄関までの空間は、車１台分程度の奥行きがあり、小さな花壇として使用中ではあるが、これを取り壊して更地にすれば、何とか「小さいながらも楽しい我が家？」が出来そうだと思いついた。

早速、本屋に行き、「つくろう！建てよう！キットハウス」と云う雑誌を購入してきて検討を開始した。「キットハウス」は、工場で加工済みの資材（木材）を購入し、組み立てる（建てる）建物のことで、構造も「ログハウス」や「ツーバイフォー」、「軸組構法（従来の日本式木造建築）」のようなものまであり、大きさも様々、建物の構造（間取り）が決まっているもの、希望に合わせて発注できるもの等があり、また、基礎工事から組み立てまで自分でやる「セルフビルド」（DIY）、基礎工事や屋根工事などは業者に依頼する「セミセルフビルド」など建築方法も様々であることが分かった。

小生が想定している「作業小屋」は、精々1 坪程度のものであり、「セルフビルド」とすることとし、費用等も考慮して検討の結果、岐阜県各務ヶ原市の「「親和木材工業

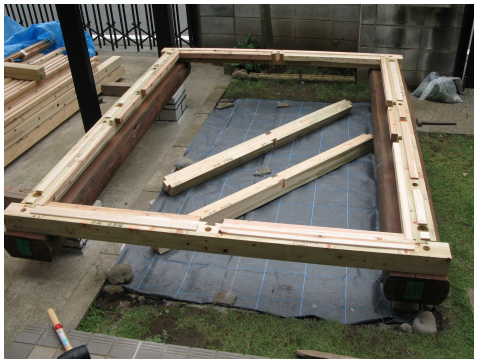
（株）」の「中空木材（コラムウッドと云う）」を使用した「ログミニキットハウス」にすることとし、床面積 1.25 坪、片流れ屋根の「作業小屋」を設計した。コラムウッドの断面は、右の図の如く中空になっており、軽量で、断熱効果があり、内側は平面、外側がログ状になっているので、外見はログハウスの様に見えるところも気に入った。

何しろ、狭い空間を利用するので、庇の出っ張りなどを考慮すると、残念ながら床面積は、1.25 坪が精一杯であったが、南北に窓、母屋に面した東側に入り口を配した小屋とした。メールでのやり取りで詳細を打ち合わせ、最終的に設計図が完成し、発注した。　総費用は、網戸、外壁塗料などのオプション、運送費込で、￥367,200（税込み）であった。



2009 年 5 月末、待望のキットがトラックで搬入された。　思いのほか資材の量が多く、駐車スペース 1 台分に山積みとなった。

寸法が決まったので、先ず、土台の基礎を設置した。元々、狭い所に建てる計画であり、南側の基礎は既存の駐車スペースのコンクリートの上、北側は前庭の土の上と、地盤が異なる為、南側の２個はコンクリート製の平板を積み重ねて固定し、北側の 2 個は、穴を掘り、大量の砂利とコンクリートで底を固めた上にコンクリート製の排水桝を地中に埋めて、枡の内側にアンカーボルト入れ、コンクリートで固めて基礎とした。駐車スペースには傾斜があり、４個の基礎の水平を取ることや、丸太基礎を止めるアンカーボルトの正確な位置への設置に苦労したが、何とか基礎を設置することが出来た。



コンクリートが固まった頃合いをみて、２本の基礎丸太、及び、その上の土台を設置した。組み立てに際しては、水平に設置されているか、各部材が直角に組み立てられているか、等これから建てる小屋の基礎となる部分であり、対角線の寸法も正確に計測しながら、Help 無しの Do it myself であり、丸一日掛けて慎重に組み立てを行った。

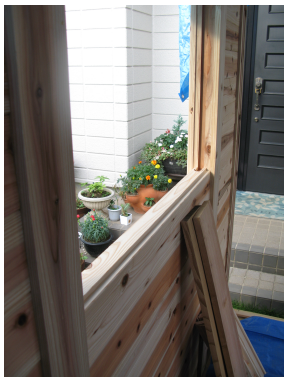
土台が完成したので、愈々躯体工事である。作成ガイドによると、柱を建てて、張桁を組み立て、屋根板を張り、床板を張る、この一連の作業を一日で行うことになっており、Do it myself では無理なので、2009 年 7 月 5 日、息子に Help を頼んで、作業を行った。神主を呼ぶ程ではないにしろ、一応、上棟式であり、工事の安全を願って、小生が、御神酒と塩で四隅を清めてから作業に取り掛かった。

組み立て始めると、大きなプラモデルの組み立てと云った感じで、図面と資材に書かれた番号に従って、指示された箇所に組み込むので、思いの外早く作業を進めることができたが、常に、水平、垂直を計測しながらの組み立てで、慎重な作業を要した。　組み立てには、大きなハンマーと、木ネジを止める為のインパクトドライバーが必要であった。

組み立て終盤には、指示に従い、外壁となる「中空木材（コラムウッド）」を下３段組み込んで、柱を固定させた。　屋根になる桁に登り、屋根板を載せてビスで固定し、一連の作業を終了したが、息子の Help を得ても、丸一日を要した。防水の為、屋根にブルーシートを掛けて、周囲もブルーシートで覆い、一応の台風対策とした。

躯体の本体が組み上がったので、日を空けて、外板（壁面）の組み立てに取り掛かった。何しろ真夏の工事だったので、連チャンは体力的にはキツかったが、記憶では、東京を掠める台風の洗礼を受けそうになったので、余り猶予は無かった。

作業は柱の間に１段づつ「中空木材（コラムウッド）」を挿れ、コーキング剤を塗って、用意されている楔を打ち込んで固定すると云った単純な作業の繰り返しである。窓枠になる部分等は慎重に作業を進めた。



「中空木材（コラムウッド）」を始め用意された木材は人工乾燥させたものであり、少々伸縮する可能性がある為、可動

する余裕をもたせる必要があり、壁面最上部は「中空木材（コラムウッド）」を使用せず、空間とし、その部分は別の板を張ってカバーする方式となっている為、前頁右下の写真では上部がその空間となっている。
数日の作業で、外壁と窓枠の設置が終わり、大凡の外観が見えてきた。

次は、屋根葺きである。先ず、屋根板の周囲を軒水切り鋼板で囲い、屋根一面に防水シートを敷き、その上にアスファルトルーフィングを敷く作業である。　若干の高所作業であるが、練習船のヤードに比べればどうと云うことの無い高さの作業であった。屋根葺きの終了で、雨漏りの心配が無くなって一安心した。

窓枠の完成に伴い、ガラス窓を嵌め、母屋の外部電源から、壁面上部の隙間にコードを通して、室内に電源を確保した。翌日、実際に雨が降り、雨漏りが無く、屋根が完成したことが確認できた。玄関となる入り口のドアを取り付けて開閉の状態を調整し、更に、元々の設計には無かったが、南側の窓に庇を付けることとして、急遽材料を集めて新設した。庇の屋根の部分には本体の屋根材の余りを使用した。

ここまでの作業が完了したのは､2009 年 8 月 15 日だった。
完成直後の 8 月 31 日には台風 11 号が来襲したが、特に被害は無かった。

当時は、「明治丸」の老朽化が進んで危険となり、海洋会 VC の「明治丸」船内ガイド活動が一時中断を余儀なくされていたが、「資料館」や「船の科学館」、「日本丸」のガイド活動は継続していたので、私用も含め結構忙しく、連続しての作業が難しかったこともあり、ここまでの作業期間が長くなってしまった。

何とか外観上は完成したが、「お化粧」が必要であり、予て、キットと共に購入した、「環境対応型水性ペイント」で、外側の塗装を施した

北欧風？に、ドアや窓の建具は黒、外装はグリーン、窓枠、及び、木口は白、とした。出来上がってみれば、当初考えていた物に近い物が完成し、結構満足している。

その後、以前購入した「電動工具」もフルに使用して内装の作業に掛かり、作業用のテーブルを作り付け、壁に棚を作り付け、また、配線して天井に電灯を設置したり、電動糸鋸を購入して設置したりと、一連の作業を楽しみながら行い、現在に至っている。

小屋の作成中は、道路を通る人から「何を作っているのか」と声を掛けられたり、完成後も「いいですねぇ」と話し掛けられたりと、近所とのコミュニケーションの役にも立っている。

完成後間もない、2011 年 3 月 11 日に、例の「東北大震災」が発生、我が家も大きく揺れた。　幸い特に損害は発生しなかったが、小生が建てた「作業小屋」は如何と点検したが、全く異常なく、入り口のドアも、歪みも無く普通に開閉出来たので、一生懸命作業した甲斐があったと、安堵し、少し誇らしかった。

いつの間にか、建築から 12 年が過ぎ、その間に、3 回程全塗装を行ったが、風雨に晒され、少々傷みが出始めている。　その間に、内部の工作機械等の装備も充実し、音楽を聴きながら、ルーペを付けて細かい作業をする等、小生の憩いの場となっている。「あの時、思い切って建てておいて良かったなぁ」と、つくずく思っている。

Do it myself で、一生懸命建てた自慢の作業小屋ではあるが、いつの間にか、家内や孫たち（と云っても皆お姫様）から、**「じじ小屋」**と呼ばれるようになり、今では我が家での「通称」となっている。その呼び名も、密かに気に入っている。　　以上

§肥田浜五郎の岩倉使節団随行とその後§

正会員　澤間譲治

前号では石川島造船所を構想していた肥田浜五郎が幕府の計画変更により、急遽横須賀造船所建設に向かう事になった顛末を記したが、本号では歴史上有名な岩倉全権使節団の欧米訪問に随行する事になった様子と、その後の肥田浜五郎と横須賀造船所の関りを中心に記載したい。

岩倉全権大使の欧米視察

明治四年（一八七一） 廃藩置県が行なわれたあとで、政府は全権を欧米に派遣して、各国の制度、 法律、経済、文化、風俗などを視察させ、これを参考として大いに内政の整備と充実をはかろうとした。また翌明治五年五月二十六日が安政条約の改新期限にあたっていたので、条約締結国と条約改正の準備のため交渉を行なうことも、この欧米使節団派遣の目的の一つであった。

この全権団の顔ぶれをみると、時の日本政府の決意がなみなみならぬものであったことがうかがえる。まず全権大使には右大臣岩倉具視、副使には参議木戸孝允、 大蔵卿大久保利道、工部大輔伊藤博文、外務少輔山口尚芳の四人を任命した。

はじめ、政府首脳者たちが大挙して出かけては国内が困るというので、全権使節の人員は全権一等使節一名、二等使節一名とするという内相談もあったが、結局国家将来の隆盛のためということで、大使、副使が上述のようにきまった。しかしそれでもなお政府部内には岩倉、木戸、大久保の三卿が一時に欧米におもむくのは得策でないと反対する者があった。とくに三条実美らは反対であったが、西郷隆盛が三条を補佐して板垣、副島とともに後事にあたることを誓ったので、ようやくこの顔ぶれがきまった。（後々この事が西南の役に繋がる悲劇をもたらした事は周知の歴史的事実として知られる）
同時に政府は各省からえり抜きの優秀な理事官、書記官などの随行員を選出し、その数は総勢四十八名にのぼった。以下その役名と氏名を列記してみると、どこかで聞いた名前がところどころに見えて来る。

これらの随員の中には、のちに日本の各界で指導的地位につく英才たちが多数入っていた。たとえば佐々木高行、東久世通禧、 田中光顕、烏地黙雷、久米邦武、 大倉喜八郎、山田顕義、田中不二磨、渡辺 ・・・・・・等々。
余談ながら、大使一行と一緒に米国まで十五歳以下の五人の少女をふくむ五十余人の留学生が同乗した。少女のなかには、のちに陸軍大将大山巌の夫人となる山川捨吉や、海軍大将瓜生外吉の夫人となる永井繁子、 当時わずか八歳の津田梅子（現在の津田塾大学の創始者）などがまじっていた。

参考資料として、使節団名簿の一部を掲載しておきます。

役職	官位	氏名
特命全権大使	右大臣	岩倉具視
特命全権副使	参議	木戸孝允
特命全権副使	大蔵卿	大久保利通
特命全権副使	工部大輔	伊藤博文
特命全権副使	外務少輔	山口尚芳
一等書記官	外務少丞	田辺太一
一等書記官	外務大記	監田篤信
一等書記官	外務六等出仕	何　礼之
一等書記官	外務六等出仕	福地源一郎
二等書記官	外務少記	渡辺洪基
二等書記官	外務七頭出仕	小松済治
二等書記官	外務七頭出仕	林薫三郎
三等書記官	外務七頭出仕	川路寛堂
三等書記官	外務七頭出仕	山内一式
四等書記官	文部大助教	池田政愁
四等書記官	外務大輔	安藤忠経
理事官	司法大輔	佐々木高行
理事官	侍従長	東久世通禧
理事官	陸軍少将	山田顕義
理事官	会計兼務戸籍頭	田中光顕
理事官	造船頭	肥田為良
理事官	文部大丞	田中不二麿
理事官	少議官	高橋豊麿
大使随行	式部助	五辻安仲

役職	官位	氏名
大使随行	外部大記	野村靖
大使随行	兵庫県権知事	中山信彬
大使随行	神奈川県大参事	内海忠勝
大使随行	権少外史	久米丈市
大使随行	租税権頭	安場保和
山田理事官随行	兵学大教授	原田一道
佐々木理事官随行	司法権中判事	中野健明
佐々木理事官随行	司法権中判事	岡内重俊
佐々木理事官随行	司法権中判事	平賀義質
佐々木理事官随行	司法権中判事	長野文炳
東久世理事官随行	宮内大丞	村田経満
田中理事官随行	租税権助	若山儀一
田中理事官随行	租税権助	安部　潜
田中理事官随行	租税権助	沖　守個
田中理事官随行	検査大属	杉山一成
田中理事官随行	租税権大属	富田命保
肥田理事官随行	鉄道中属	瓜生　震
田中不二麿理事官随行	文部中教授	長与乗継
田中不二麿理事官随行	正七位	中島永光
田中不二麿理事官随行	文部中教授	今村和郎
田中不二麿理事官随行	文部中教授	内村良蔵
高崎理事官随行	少議生	安川繁成
高崎理事官随行	灯台権大属	藤倉見達

肥田浜五郎、理事官として参加

肥田為良（浜五郎）は七名の理事官のうちの一人として参加している。 職名は造船頭で、造船関係はこのときは工部省の管轄であった。したがって工部省の代表理事官である。なお肥田理事官の随行として工部省から鉄道中属爪生震が加わっているが、これも主として工部省の技術面の視察調査を命ぜられたものだろうと思われる。
明治四年十一月、出発に先立って三条実美は理事官に次のような勅旨を伝えている。

１．各国のうち、文明の最も盛んな国において、本省で緊要の事務、目下実地に行なわれている状況を視察し、その方法を研究講究し、内地で施行すべき目的を立てること。
２．研究講習する事務の科目を分け、またその国を定め、行動や講習の順序や期限などは特命全権大使の指揮に従うこと。
３．随行の官員に事務の科目を分けるのは、特命全権大使の指揮によるが、その分担の事務を監督しこれを整理する責任を負うこと。

４．本省要用のため、外国人を雇い、書籍、器具などを買うような場合は特命全権大使の決裁にしたがうこと。
５．臨機の事はすべて特命全権大使の指揮をうけて処置すること。
６．業務の研究結果、学習の進行程度などは時々記録して報告すること。

なおこの勅旨とは別に、その前に三条実美が九月十五日勅を奉じて下した「事由書」があるが、これは微に入り細をうがって、理事官の目的、行動、調査、 その他あらゆる点についての注意を述べている。 長文で、さきにあげた勅旨の内容と重複するところが多いので、ここでは省略するが、そのなかで理事官を三課に分けている。各理事官はその三課の中のいずれかの主任となって、その事務を担当するよう命じている。三課とは、

第一課…制度法律の理論とその実際に行なわれるところを研究し、外国事務局、議事院、裁判所、会計局等の体裁と、現にその事務を行なう状況をよく見、これをわが国で採用して設置する計画を立てる。

第二課…理財会計に関する法則、租税、国債、紙幣、官民為替、火災海上盗難受合（保険）等より、貿易、工作、汽車、電源、郵便の諸会社 金銀鋳造所、諸工作等の方法規則を研究し、その体裁と現に行なわれる状況とをよく調査して、これをわが国に採用して施行すべき目的を立てる。

第三課… 各国教育の諸状況、すなわち国民教育の方法、官民の学校取立方、費用、集合の法、諸学科の順序、規則および等級を異にする面などを研究して、官民学校、貿易学校、諸芸術学校、病院、育児院等の体裁および現に行なわれている状況をよく調査して、これをわが国に採用して施設すべき方法を研究する。

この三課のうち肥田理事官の職務は第二課の工作、汽車、電源等諸工作の方法云々にあてはまる。
またこの勅令では次のように述べているところもある。
「我国の利益となることはすべて、之を研究熟覧すべきは勿論であるから、海陸軍の法律、給料の多寡、これを指揮する方法を研究し、各国有名の港湾では、税関の状況、軍器庫、海軍局、造船所、兵卒屯所 城堡海陸学校、 製鉄所などを親しく視察し、また教官の説明は最も大切であると注意すること」
と肥田の職掌に関係ある部分も指令している。こうしてみると肥田理事官の任務は非常に多かったと思われる。後年、肥田は理財に長じ、皇室財産の保全を期したり、銀行や鉄道の設立運営をしたりしているが、おそらく彼の数理的な緻密な頭脳で財政面をも一

緒に調査研究してきたためだろう。それに彼は今回で三度目の洋行で外国に慣れていて、いくらか余裕があり、少なくともオランダ語はもちろん、フランス語、英語も通訳なしでも話せたかもしれない。
以上、肥田浜五郎の職務を中心にして理事官の仕事を述べたが、一方、書記官の任務は公務の文書を集め、大使書類、公署日記 謁見式を編成し、主として事務的、外交的な業務を扱っているが、省略する。

「米欧回覧実記」
さて岩倉全権大使は欧米派遣に際して、大使の行動や各国各地で観察したことなどはできるだけ公表して、帰国後国民に知らせる義務があると考え、大使随行久米丈市（邦武）と書記官杉浦弘蔵に毎日の行動や見聞を日記風に記載させた。久米は帰国後整理して、明治十一年十一月に「米欧回覧実記」と題して全五篇を日記風に書いて公刊した。日記風なので非常に詳細な記事もあれば、簡単な記事もある。主として岩倉大使の公式行事は克明にしるし、また各地の産業、風物、 その他の特徴なども克明に書きしるしている。写真もできるだけ多く挿入し、外国の様子がわかるように配慮している。

現在では、上図の如く岩波書店から出版されているので、一般図書館等で閲覧可能

本書の例言から二、三拾ってみると、
「この書は遣欧米特命全権大使、東京を出発し、太平海を航し、米国にとどまり、大西洋を経て英蘇両部を回り、欧陸に渡り、仏の南部をすぎ、地中海より紅海、アラビヤ、

印度支那の諸海を航海して東京に復命するまで日々目撃した所を筆記した。明治四年辛未十一月十日から、六年九月十三日まで、すべてで一年九ヶ月と二十一日の星霜で、米欧両州の著明な都会は大半回歴した」
「すべて各国で回覧した所は皇帝および皇后の特旨として、あるいは政府の代表として待遇され、接伴諸員も歓待され、都会人の接待、製作所の招請、あるいは貴族大姓の厚意をうけ、又庶民の協同した大歓迎もうけた。各国と親善を密にし、いろいろと新しい知識を得て、今後日本に応用して大いに役立つものが多いと信ずる」
等々の記述が続く・・・。

使節団巡視の模様

「米欧回覧実記」にしたがって、巡視の模様をざっと眺めてみる。岩倉大使一行は明治四年（一八七二） 十一月十日、東京を発ち、十二日太平洋汽船会社「アメリカ号」で横浜を出帆 十二月六日米国サンフランシスコに上陸、大歓迎を受けた。それから西部の各地を訪問し、工場見学や富家の招待を受けたりして忙しい日々をすごした。このころはアメリカで最も寒い時期で、大雪が降り、十二月二十四日、サクラメントからシェラネバダの山脈を越えてロッキー山脈にさしかかったときは一面、白一色におおわれていた。
翌五年一月十八日、ミシシッピー川を渡り、イリノイ州に入り、深夜シカゴホテルに到着した。全権大使一行はアメリカの広大さと、その広い土地をわずかの日数で走る汽車の偉力におどろいた。後年、汽車はわが国でもさっそく敷設にかかったが、国の資力だけでは要望を満たすことができず、肥田らが中心になって日本鉄道会社をおこし、東京、青森間の鉄道敷設をはじめる。
　さて一月二十一日ワシントン泊りの駅に到着すると、在留弁務使森有礼が政府接待掛とともに出迎えに出ていた。翌二十二日正午グラント大統領に謁見し、さかんな歓迎を受けたあと、二月二日から国務省に入って交渉を開始した。
日本側の希望はわが国内での領事裁判権の廃止、関税自由権の回復、外国軍隊の上陸禁止などであったが、会談第一日から国務長官フィッシェルによって突っ放されてしまった。それは元首である天皇の委任状を忘れてきた全権団とは交渉できないという理由であった。結局、大久保利通と伊藤博文の両副使を日本へ委任状をとりに帰すことにしたが、彼らが戻ってきたときにはすでに岩倉も東京で欧州各国と一緒に条約改正の交渉をすることにし、米国での改正交渉の意思をすててしまっていた。したがって、すでに欧米諸国派遣の目的の一つは挫折してしまった。
それからの一行は視察を目的とする使節団に変わり、七月三日半年ぶりにアメリカを去って、ボストンからイギリスに向かい、七月十四日ロンドンに到着した。イギリスには四カ月滞在し、 当時世界第一の大帝国であり、工業国であったイギリスの国内を熱心に視察して回った。視察したおもなところはロンドン博物館、動物園、農業博覧会、郵

便局、造幣局、監獄、病院、図書館、バッキンガム宮殿、ロンドン塔、国会議事堂、天文台、灯台、劇場、商工会議所、軍港、兵営、海軍要塞、造船所、
陸軍演習場、アームストロング大砲工場、砲弾製造所、製鉄所、各種金属工場、機械工場 ランカシャーの紡績工場、時計工場その他、ありとあらゆる施設を根気よく見て回った。これは日本の富国強兵、近代化の計画をおしすすめる上でかけがえのない実地の勉強となった。

十一月十五日にイギリスを出発して、十六日にはパリに到着、二十六日にはチェール大統領に謁見した。当時のフランスは普仏戦争でドイツに敗れ、パリ・コンミューンの内乱があった直後であり、 新憲法もまだきまらず、イギリスなどと国情が異なって、日本の使節団の心をそれほどとらえなかったようである。
この欧米視察旅行を通じて、使節団に最も魅力のあった国は新興のドイツ帝国であった。ドイツは一八七一年（明治四） フランスを破って民族国家を統一したばかりであり、今後日本が外交上制度上、後進国として大いに、見習わなくてはならぬ点が多かった。とくに世界的に有名な宰相ビスマルクは日本の使節たちを親しく招待し、ドイツがいかにして、横暴な先進国との競争に打ち勝って、弱小の後進国家から今日の強大な大帝国になりえたかを、くわしく説明した。全権団たちはわが身につまされた思いで、深い感銘を受けたことであった。
その他ベルギー、オランダ、デンマーク、スウェーデン、ロシア、イタリア、オーストリアなどを回り、豊かな見聞を積んで、明治六年九月十三日、二年に近い年月と百万円の国費を使って、政情騒然たる最中の日本に帰って来た。使節団の一人一人の胸の中には、これからの日本に対する大きなビジョンが描かれていたと思われる。（主として「図説国民の歴史」よりの引用）

肥田主船頭と横須賀造船所　海軍主船頭となる

明治六年（一八七四月十七日、欧米視察から帰ってみると、肥田の職掌は大きく変わっていた。先に明治五年十月十八日横須賀造船所および横浜製作所は、工部省から海軍省へ転局させられ、海軍省主船寮の所轄となっていた。当時肥田が欧米派遣のため、主船寮の長は欠員であったので、一時、赤松大三郎海軍大丞が管理していた。

帰朝後の報告や庶務に忙殺された後、ようやく六年五月二十九日、肥田為良は海軍大丞兼主船頭に任じられ, 横須賀造船所の事務をも管理することになった。このころから明治九年までが肥田の海軍でもっとも仕事のやり甲斐のあった時期で、事実いろいろの事業や多くの改革を行なっている。
海軍省は明治五年二月十七日、兵部省が陸軍省と海軍省とに分かれたのがそもそものはじまりであるが、創設時の海軍省は秘史局、軍務局、造船局、水路局、会計局の五局があり、三月七日付で一時翻訳局があったが、すぐに四月二十四日秘史局文書掛と

合併になった。五年十月には秘史局、軍務局、会計局の三局とし、造船局は主船寮、水路局は水路寮となった。
主船寮の長が主船頭で、はじめ欠員にしておいて、肥田が帰朝とともに主船頭についたのである。このとき肥田は海軍大丞になっていた。海軍省の沿革はなかなか複雑であるが、明治九年に主船寮は再び主船局となっている。このとき肥田はもう海軍の現役を退官している。
なお明治六年九月二十七日主船頭肥田為良は又もとの名前の肥田浜五郎に返っている。その事情は不明だが、浜五郎の方が通りがよかったためかもしれない。
同年十月二十三日には六十馬力運送船函谷の進水式を挙行、勝海軍大輔が臨場した。また同二十五日には軍艦迅鯨の建造に着手した。同じ日に勝は参議並に海軍卿に昇進している。さらに十二月四日ウェルニーの計画設計によって、数カ月前から建造に着手していた軍艦を清輝と命名した。
十二月十七日、天皇、皇后両陛下が横須賀造船所天覧のため、午前八時新橋停車場発車、横浜で蒼竜丸に乗艦、午後一時半横須賀御着、所内をご覧になった。
十二月二十三日第一利根丸の艤装がなり、海軍省の命によってこれを兵学寮派出員兵学少助教永田嘉之に渡し、兵学寮生徒の練習船用に供した。
こうして海軍横須賀造船所は着々とその目的に向かって動きはじめた。当時の横須賀港はもちろん軍港などというしろものではなく、湾内にはただ造船所があるだけだった。
明治七年一月十二日、海軍省は前年の十二月二十二日に横浜製作所を大蔵省に交付し、あわせて同所詰の官吏および雇仏人も一緒に譲渡するむね布達した。
七年一月、第一ドックの竣工についで、明治四年六月その開削に着手した新ドックはこの月をもって竣工した。これが第三ドックである。
四月四日海軍大丞赤松則良（大三郎）は海軍少将兼海軍大丞に任ぜられて、台湾事務参軍として、同都督陸軍中将西郷従道とともに、著地征討の命を受けたので、日進、孟春、雲揚等の各艦を横須賀に回航して、至急修理を加え出航の準備をした。
　また以前からツェルーは相州三浦郡走水村から淡水を造船所内に導水し、工場、船舶の水として使うことを計画し、五月二十七日肥田主船頭に相談したが、肥田もこれに賛成して、その成可を得た。しかし本省では導水する鉄管のことから議論がおこり、ついで費用がかかりすぎるという名目でいったん中止を命じたが、この事業はじつは造船所の必要事業であったので、肥田主船頭はその費用に拘泥すべき性質のものではないとして、直接海軍卿に訴えた。勝海軍卿もまたその事情を了解して、ついにこれを許可した。それで五月から水道管買い入れについて折衝し、支払いを四回払いとして、三カ月ごとに三千五百ドルずつ支払うこととし、注文の品が到着次第工事に着手することとなった。

横須賀造船所の初期の組織

明治七年（一八七四）七月十八日、造船所の機構を改正して造船課、機械課の二課を加え、以下の組織を構築したが、実質的造船所長はフランス人のウェルニ―が勤め、各課各掛の要所にはフランス人技師が配置され、この段階ではまだまだ日本人による造船所運用とは言い難い状態であった。

庶務課	
主計課	
倉庫課	
管材課	
警査課	監夫掛
	取締掛
	巡避掛
造船課	船台掛
	船梁掛
	製鋼掛
	製帆掛
	艤装掛
	鋸鉋掛
	填隙掛
	端船掛
	滑車掛

機械課	錬鉄掛
	鋳造掛
	模型掛
	製罐掛
	旋盤掛
	船具掛
	組立掛
製図課	
修船課	
学舎課	
病舎課	
通訳課	

上図のうち学舎課というのは、造船所で技術生徒を養成している学校をとりあつかう課である。造船所の学校については次第に整備され、四月に首長のウェルニ―が入学試験を実施し、科目はフランス語、洋算および和算の筆記で、生徒はもちろん等級に応じて講習の課業を異にした。第一等生は機械学、物理学、算学、代数学、図学、和文仏学を終日、第二等生はフランス語、算学、幾何学、図学、および仏文和訳を午後半日の課業とし、午前半日は各工場で実習に従事する。第三等生はフランス語、算数及び図学を終日の課業とした。

この学校は明治十七年には横須賀造船所学舎と称し、十九年海軍工生学者、二十二年海軍造船工学校と改称している。

横須賀造船所の運営を日本人の手に移行する為の肥田浜五郎の努力については次号へ譲る事にします。

特定非営利活動法人　日本海洋塾
＜NPO　Meijimaru　Memorial　Academy＞
事務所：〒135－8533東京都江東区越中島2－1－6
東京海洋大学越中島会館2F
TEL：03-6458-5272
FAX：03-6458-5272
E-Mail：kaiyojuku5122@train.ocn.ne.jp
ホームページURL：http://kaiyou-juku.org